



## 米国ローレンス・リバモア研究所 での10カ月

飯田 敏行\*

日記を開いて数えてみると、合計17回。10ヶ月余りの米国リバモア滞在中、週末にパーティーやディナーに招待された数である。歓迎パーティー、誕生パーティー、もちつきパーティー、新築パーティー、囲碁パーティー……。

核融合研究の関係でローレンス・リバモア国立研究所に滞在する機会を得たが、週末がこれほど忙しいものになるうとは思ってもみなかった。

カリフォルニア州リバモア市に着いたのは、1982年2月1日、着てきたコートが全く邪魔になる暖かい日であった。透き通った空と暖かい風が海外生活初めての私を優しく迎えてくれたように感じた。その日は研究所の近くのモーター（日本のビジネスホテルに相当する）に泊った。翌日、研究所に出頭した私は、研究所内のRTNS-II（核融合中性子照射装置）施設の責任者であるローガン博士と彼の秘書であるバージニアに付き添われて非常に多くの手続きをすることになる。研究所内の半分以上の施設が軍事研究に関係しているからだ。ある部屋では日本語で説明を受けた。カメラ、テープレコーダー、酒・アルコール類を研究所内に持ち込んではいけない。爆発物は…。担当官はどこにいたとは言わなかったが日本に4年いたという。そして、最後に赤い名札が渡された。これをいつも身につけると言う。研究所内には、何重にもゲートがあり、何回も名札のチェックを受けなければならない。名札には名前の他に研究所内で入ることのできる施設が示されており、そこ以外には全く入ることができないのである。

研究所員の名札の色は丁度交通信号のように

\* 飯田敏行 (Toshiyuki IIDA), 大阪大学, 工学部, 原子力工学科, 助手, 工学博士, 原子力工学



もちつきパーティにて

3色に分けられていた。赤い名札は私のように外国籍、あるいは何らかの理由で研究所にとって要注意人物、黄色の名札は調査中の一時雇用者？緑色の名札は長期間勤務している信用ある所員である。また、一時訪問者はすべて白色の名札をつけ、必ず緑色の名札をつけた所員にエスコートされていた。ゲートの警備員はピストルを保持していたが、若い女性である時も多く、見掛けによらずとても親切であった。

滞在中、一度だけ道を間違えた。近道をしようとしてある建物の裏口から入ったが、運の悪いことにそこは制限区域であった。しまったと思ったが、ドアの鍵が自動的にかかってしまい、出るに出られず困っていると、テレビカメラとインタフォンに呼び出され厳重に注意された後、外に出してくれた。制限区域（グリーンエリア）の建物の出入口は集中監視されているのである。

研究所での生活は非常に規則正しいものであった。朝8時に仕事を始め、午後4時半には仕

事の途中でも必ず終了する毎日であった。研究所のほとんどの所員がそのようにしていた。彼等にとって午後4時半という時刻は、帰宅後パーティーをしたり、音学会に出かけたり、仕事の後家族や友人と愉快地過ごす丁度よい時刻なのである。しかし、私にとっては帰宅時刻が4時半というのは少々早過ぎた。研究所から2km程離れた所にバス、トイレ、キッチン付の離れを借りていたが、そんなに早く帰っても大してすることもなし退屈していた。それを見透かしてか、施設長をはじめ施設のスタッフが、機会あるごとに夕食や野球やバスケットボールの観戦、コンサートやオペラなどに誘ってくれた。最初はその親切がとてもうれしかったが、それが苦痛に変わるのに1ヶ月とはかからなかった。仕事を終え、夕方から出かけて夜中まで遊ぶわけだから、帰る頃にはほんとうに疲れ果てた。翌日の仕事に影響のでないわけはなかった。特に、週末の大計画なのには参った。彼等についていくのが精一杯で、とても楽しむどころではなかった。

リバモアに来て丁度1ヶ月程経った頃であったと思うが、ディズニールランド旅行は圧巻であった。その週の仕事を終え、同僚のブルース夫妻とその子供達そして私の5人が午後5時にリバモアを車で出発。どこまでも真っ直ぐな道を120km/hr以上のスピードで走る。最初は、子供達の学校のことや日本の様子に話がはずむ。しかし、途中夕食やドライブインで休憩はとるものの次第に疲れてくる。延々7時間、ロサンゼルスホテルに着いたのは夜中の12時を過ぎていた。早々に部屋に引きあげる。翌朝(土曜)開園前に並んで閉門まで見物する。半分位のアトラクションは見ただろうか。確かに大人も子供も楽しめる。しかし、疲れる。日曜は西部開拓時代のゴーストタウンなどが保存されているナッツベリー・ファームまで足をのばす。駅馬車に乗ったり、夕方まで子供達と遊ぶ。そ



ディズニールランドの近くのモーターにて  
左より筆者、ブルース博士、ゾウの形をした植木

して、再びリバモアへのドライブ。さすがに今度は話し好きの彼等もほとんどしゃべらない。車の運転をしなければならぬブルースにすまないと思いつつも、睡魔に負けて眠りこける。やはり真夜中にリバモアに着く。月曜日、彼等は何もなかったように定刻に出勤する。こちらは疲れで何もする気が起こらない。彼等はほんとうに大丈夫なのだろうか？

リバモアからサンフランシスコへは、車で約1時間、バスとバート(高速鉄道)を利用すれば1時間半で行くことができる。日本料理も食べることができるし、日本の雑誌もたくさんある。日本人にも会える。時々、週末に1人で出かけた。観光バスも便利だが、ケーブルカーと徒歩でのんびり行くのがいい。ツインピークスからの自然の景色や夕暮時のゴールデンゲートブリッジの眺望がほんとうに美しい。アメリカ人無しで1人でのんびり眺めるのが一番いい。

思いつくままにとりとめの無いことを書いたが、とにかくいい経験をしたと思っている。